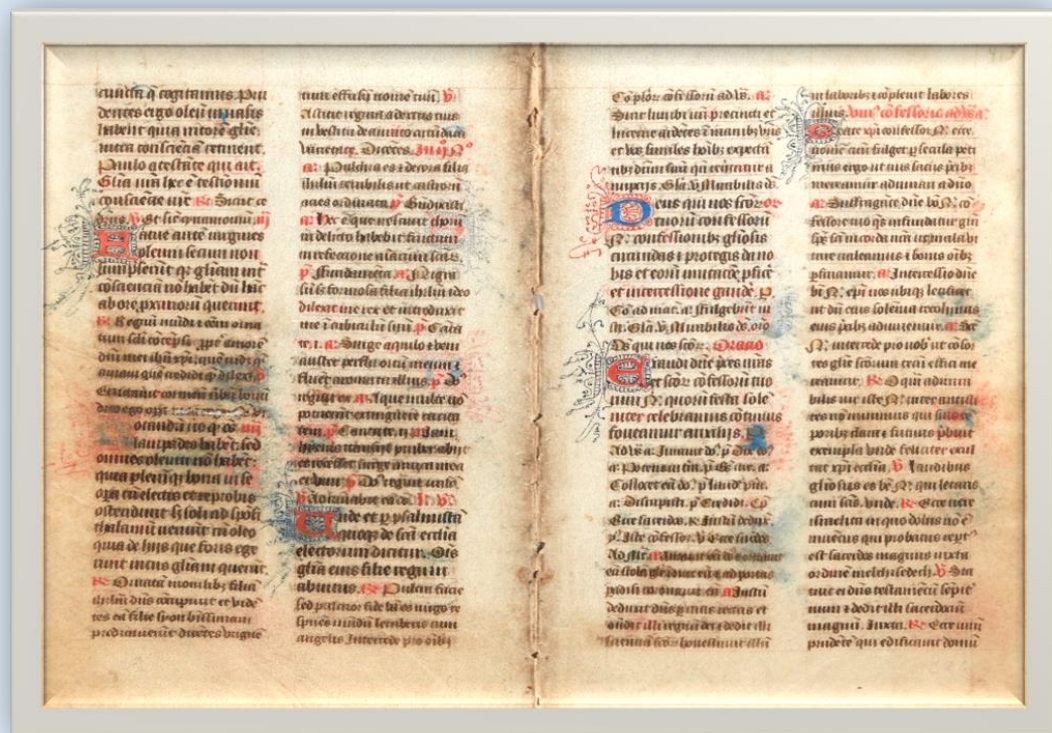
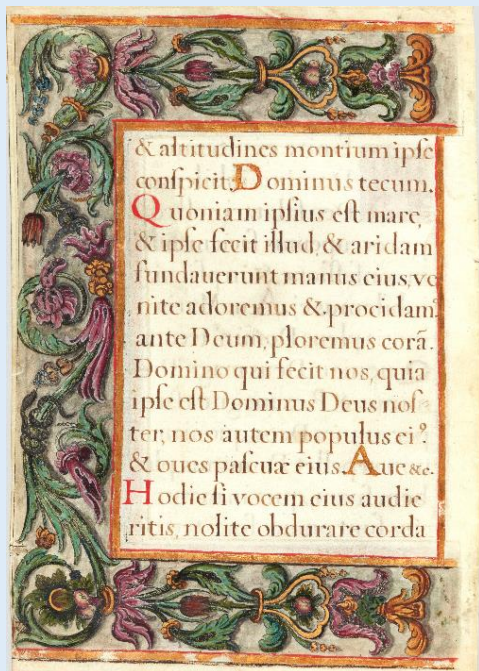


# 鶴見大学図書館 貴重書ニ二展示 「西洋写本零葉」

7月8日(月)~7月31日(水)



## 時祷書の零葉 2 枚：聖母マリアのための聖務日課（朝課）

羊皮紙、1550 年頃（17 世紀 ?）、イタリア

祈りの儀式で用いられる中世の典礼書写本は、しばしば有名な画家によって飾り文字や縁取り、様々な図像が描きこまれた豪華本であることが少なくない。そうした美しい写本は時に裁断され、美術品として鑑賞の対象とされる。2 枚の零葉は、同一の時祷書から切り取られた一続きの 2 葉である。「時祷書 (Horae)」とは私的な祈りのために編纂された小ぶりの祈祷書であるが、裕福な個人に所有されることが多かったため、絵本のように多数の挿絵がみられる。

## 聖書（零葉）：詩篇 1 番～6 番（ハープを弾くダヴィデ王）

羊皮紙、13 世紀後半（1270 年頃?）、フランス北部

聖書詩篇の第 1 葉で、詩篇の冒頭を飾る B は特に大きな文字で書かれ、その中にダヴィデ王がドラゴンの頭の彫刻で飾られたゴシック・ハープを弾いている姿が描かれている。その楽器をよくみると、弦や弦を巻きつけるピンがみとめられ、胴体にはサウンドホールとおぼしき穴まで描き込まれている。各篇の最初の文字も唐草文様で囲まれた大きな飾り文字で書写されている。

13 世紀にはパリを中心に、現代の語学辞典の紙を思わせるほど薄い羊皮紙を用いた聖書が多数作成されたが、この零葉の羊皮紙も他のものに比べてとても薄い。なお同じ写本に由来する零葉が、国立西洋美術館（内藤コレクション）に所蔵されている。

## 聖務日課書（第 413-414 葉：ビフォリウム）：聖人共通の聖務日課

羊皮紙、1260 年頃、パリあるいはフランス北部

中世の写本は通例、羊皮紙を二つに折りしたものを 4 枚重ねにし、8 葉=16 ページの冊子を複数冊綴じて作られている。「ビフォリウム bifolium」とは、文字通りそうした二つ折にされた 4 枚のうちの 1 枚（2 葉=4 ページ分）のことである。展示では 2 ページ分が見開きの状態になっているが、本来は二つに折られて 4 ページを構成していた。

中世のキリスト教社会において、毎日、決まった時刻に行われる祈りの儀式を「聖務日課(オフィキウム officium)」とよぶ。その聖務日課で唱えられる全てのテキストを収めたものが、聖務日課書 (breviarium) である。展示のビフォリウムには、聖人に捧げられた典礼に共通の聖務日課が書写されている。各見出しは一目で分かるように赤で書かれている。また聖書朗読や祈祷文は大きな飾り文字で書き出されているのに対し、聖歌の歌詞は小さめの文字で書かれている。

## 聖務日課唱集 (Antiphonarium) (断片)：待降節第 4 主日(日曜日)のアンティフォナ« シオンで角笛を吹き Canite tuba »のイニシアル C (?)

羊皮紙、15 世紀、ドイツ語圏（北部?）

中世の写本では、章や節のはじめが一目で分かるように最初の文字が大きな飾り文字や絵入りの文字で書かれていた。そうした彩色画入りの飾り文字は美術的な価値が高ことから、その部分だけが切り取られて、鑑賞の対象とされることがよくある。角笛を吹く貴族とその横で歌う男性が描かれたこの断片も、横幅が 500 ミリを超え、2 段で書かれた大きな聖務日課聖歌集から切り取られたものであると推察される。

この文字が、アルファベットのいずれの文字か定かではないが、図像と前後の聖歌から、待降節第 4 主日(クリスマス前の日曜日)に歌われるアンティフォナ« シオンで角笛を吹き (Canite tuba in Sion ...) » のイニシアル C であると考えられる。左側の欄外には架空の動物グリフィン（グリフォン）が描かれている。断片の上部にはその前の週の第 3 週日（火曜日）の典礼で歌われるアンティフォナ « 立ち上がれ、立ち上がれ » の一部 « -cla colli tui, ca- » とその楽譜がかろうじて残されている。